

特 別 企 画



学生時代にやっておきたかったこと ーやはり学生時代の勉強不足は 後に多少は響きますー

システム生化学分野
教授 松本 雅記

このお題をいただいて、何か思いつくかなと考えながら締め切り期日になってしまいました。やっておけばよかったことを考えるのはやはり大学時代かなと思います。私は理学部化学科に入りました。医学部の皆さんと異なり、理学部は将来の職業が特定されません（実際、私の同級生の大半は化学とは関係のない職業に就いています）。なんとなく研究職に就きたいなという直感で理学部を選択しましたが、入学と同時にそんな思いは忘却の彼方で、アルバイトや遊興に耽ってしまいました。大学の講義もほとんど出席せず、試験もギリギリで乗り越えるという有様で、そのまま一般企業に就職するのかなという気持ちで、卒論研究に雪崩れ込みました。卒研での配属研究室は、先輩たちが企画する飲み会で話を聞いて希望を出すという仕組みで、楽そうな研究室を第一希望にしました。しかし、人気の研究室は希望者多数で、くじ引きで外れてしまい、他から選ぶことになりました。残った研究室は当然、人気のない研究室ばかりです。私は、開き直って一番人気のない（＝最も先生が厳しい）研究室を希望しました。研究室に配属されると、生活が一変しました。研究室には指導教員、4年生の先輩、さらには修士課程や博士課程の先輩が、毎日朝から晩まで実験しています。なので、当然毎日研究室に行かないといけないわけです。研究室配属前まで、朝、定時に起きることさえままならなかった私ですが、実験を教えてくれる先輩を待たせられないという思いで朝から大学に行けるようになりました。それどころか、4年生になる頃には、活気のある研究室の雰囲気は馴染み、朝から晩まで実験することが楽しく思えるようになりました。

このように毎日実験などで忙しい研究室であるにも拘らず、頻繁に飲み会が催されていました。飲み会では、たわいのない話がほとんどなのですが、時々、大学院生の先輩や先生が研究の話もしています。知識もほとんどなかった私は話に全くついていけず大きなショックを受けたことを覚えています。毎日指導教員の

先生や先輩とのディスカッションを繰り返し、少しずつ知識や論理的な考え方を身につけていきました。

4年次には就職活動もしましたが、学部卒で本当の意味での研究職につけないという現実を知り、途中から大学院に進むことに決めました。修士課程では、さらに研究にのめり込みました。研究室の伝統で圧力と生体構造の関連性に関する研究が行われていました。自身のテーマは高圧力で赤血球膜物性と膜タンパク質との関連を調べるというテーマで、興味を持って取り組みました。修士1年次に学会発表を行い、その時に「赤血球に通常ではありえない圧力をかけて何がわかるんだ？」という質問を受け、答えることができませんでした。今考えたら、非生理的な高温下でのタンパク質発現から分子シャペロンは見つかったわけですし、正常状態で隠れている事象を極限状態で引き出す事例はたくさんあります。そのような知識があれば答えることはできたでしょう。この経験から私は自分の研究において常になんの意味があるのかということを自問することを心がけるようになりました。後に、タンパク質の絶対量計測技術に関する論文を発表した際、海外の著名な研究者から、「その技術はとても重要だと思うが、あなたの最終的なゴールはなんですか？」と聞かれました（今度は答えることができましたが、あの最初の学会発表での経験がなければ答えられていないかもしれません）。

さて、本題は学生時代にやりたかったことですね。上述したように、卒論～博士課程まで同じ研究室で過ごしましたが、他の大学で博士課程を過ごすものもありだったかなとは思います。ただ、大学院を出た後はあらゆる意味で正反対の研究室で博士研究員を行いましたし、外部に研究者仲間もできたので特に後悔はしていません。また、私的なことですが、卒業旅行なども一切できませんでした。プライベートな旅行ではないですが、今は学会出張で色々なところに行けます。仕事なので観光はできませんが、現地の美味しいものぐらいいは食べることができます。なので、これも違います。今考えて取り返せないのは、大学生の研究室配属前の3年間、もっと自分の下地になる勉強をすべきだったと思います。現在大学の教員という立場ですので、自身の専門知識は常に得ることはできます。一方、専門分野外のことは基礎的なことでさえなかなか学ぶことはできません（頭の柔軟さも年と共に失われます）。これ、医学部の学生さんは必須科目がたくさんあって真面目に勉強しているので、ほとんどの人はやっておけばよかったことになりませんね。



学生時代にやっておきたかったこと —今の時代に読書のすすめ?—

放射線医学分野
教授 石川 浩志

学生時代と卒業後の生活（多くの方は医師として働くと思いますし、家庭も持つと思います）で一番大きく違うのは、自由に使える時間の長さだと思います。今の医学生は私が新潟大学医学部医学科に在籍した平成一桁の時より講義や実習の時間が長くなり、密度も濃くなり、おそらく大変になっていると思いますが、それでもやはり卒業後の方が忙しくなるのは確実です。この原稿の執筆も締め切り前日の夜になってようやく取り掛かりました（間に合うと良いのですが）。それを踏まえて今回のテーマに当てはまりそうなものを思いつくままに挙げると、海外旅行、留学、英会話、部活以外のスポーツ、家庭教師や塾講師以外のバイト、ボランティア、料理、そして大著の読破でしょうか。しかし、これらの中には卒業後にも（時間が限られても必要に迫られることで）取り組むチャンスがあるものが含まれます。そこでここではあえて、時間がないと取り組むことが難しく、なおかつ取り組むきっかけが訪れにくい大著の読破を取り上げてみたいと思います。

今の若者は本を読まなくなつたとよく耳にしますが、皆さんはいかがですか。かくいう私も高校の途中まではほとんど読書をしませんでした。その理由は定かではありませんが、小中学校の読書感想文のための読書はよくなかったと思います。ちなみに高校の途中までに読んだ本で一番の大著はおそらく手塚治虫か水島新司（つまり漫画）だと思います。それがなぜか（きっかけははっきり覚えていませんが受験対策だったかも？）高校の途中から突然本をたくさん読むようになり、それは大学生になってからも続けました。ジャンルは小説、ノンフィクション、新書が主だったと思います。当時は記憶力が今より良かったので、前日に読んだ内容を忘れてしまうようなことも少なく、勢いよく読み進めることができました。今も公私にわたって多くの本を読みますが、やはり時間が細切れになるこ

とと、記憶力の低下、そして目の老化などから当時の勢いはすっかり影を潜めました。プライベートでは昔読んだ本を再読することも多くなりましたが、それはそれで理解が深まったり新しい発見があったりして楽しいです。

学生時代に読んだ本の中で一番の大著は何かと聞かれると、ページ数ではわかりませんが、質と量をトータルで考えるとおそらくドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』ではないかと思います。最初の方は正直退屈で読み進めるのが苦痛でしたが、後半に進むにつれて読むスピードがどんどん加速していきました。のちに芥川賞作家の金原ひとみさんが、新潮文庫の『カラマゾフの兄弟』の帯に「上巻読むのに4か月。一気に3日で中下巻！」という名言を残しています。私が読んだときのペースもまさにそれでしたので、その文句を最初に見たときには表現の絶妙さに感動するとともに、最初の方のスローペースは自分だけではなかったと安堵しました。この「上巻読むのに4か月」というのは卒業して時間がとれなくなると難しく（おそらく永遠に読み終わらない）、「一気に3日で中下巻！」というのも一見よさそうですが実は危険です（仕事や家庭生活に悪影響を及ぼす）。ちなみに学生時代にはトーマス・マンの『魔の山』も読破しましたがなかなか大変でした。そうはいっても最後には予想外の展開が待っていましたし、その時に読んでいなかったら一生読むことはなかったであろうと考えると非常に良い経験であったと思います。そういう意味で、まだ読んだことのないトルストイの『戦争と平和』とか、プルーストの『失われた時を求めて』などの名作かつ前二作を超えるような分量の作品については、今後読める見込みが全く立たないので「学生時代にぜひとも読んでおきたかった」と言えます。

かなり偏った内容で読書に興味がない方には何も響かなかったかもしれませんが、ここから何かを導き出すとすれば、卒業後には学生時代より自由に使える時間が間違いなく少なくなるので、時間がたつぷりないとやるのが難しくて、なおかつ卒業後にはやるきっかけがあまり訪れなさそうなことにあえて取り組んでみてはいかがでしょうか、ということになります。もちろんそちらに入れ込みすぎて学業が疎かになるようなことがないように気を付けてください。



学生時代にやっておきたかったこと —仲間や恩師との縁は生涯の宝—

薬理学分野
教授 平島 正則

学生さんから原稿や講演を頼まれるのはとても光栄なことです。私が学生の頃は、緩いカリキュラムの中で将来やりたいことを見つける時間だという風潮が強かったように思います。1989（平成元）年に京都大学医学部に入学して1995年に卒業するまでの間、当時の時代背景の中で文字通りの自由な時間を過ごしました。自分の内面と向き合い好きなことに時間を使い、気が置けない友人たちとたくさん時間を共有し、いろいろな日雇いバイトで社会の広さと厳しさを知り、高学年では勉強も頑張りました。やり残したことはあまり無いのですが、今の学生さんに伝えたいことを含めながら振り返ります。

一つ目は、在学中から思っていたことですが、できれば全ての同級生と一度はお話しておきたかったです。縁に恵まれてたくさんの友人と深く付き合えて幸運でしたが、同級生のおよそ3分の1と話したことがないまま卒業を迎えました。部活は早々に辞めてしまい遊びとバイトに精を出す日々で、SNSなど無かった時代ですので実習で同じ班にでもならなければ話す機会がありませんでした。同級生は無条件に状況を共有できる貴重な存在ですので、少しでも交流を広げて多様な価値観を認める寛容さを身につけて欲しいと思います。

二つ目は、教員の先生方と接点を持ちながら学べば良かったです。講義出席は不真面目なのに、試験前に中途半端な勉強するのは性に合わず一から教科書を読んでいたため、本試験に間に合わず再試験の常連でした。自力で教科書を読む勉強は苦労が多かったので、リアル空間の講義や実習で分からないことを質問するのがスタイルに合っていた気がします。自分が教員の立場になり、講義や実習で質問してくれたり医学研究実習・研究医養成コースや懇話会・将棋同好会等で縁があった学生さんと、近況を話したり学外で食事したり遊んだりして、卒業後も縁が続くのはこの上なく嬉しいことです。私も学生時代に学びながら先生方と

のご縁がいただけたら最高だったと思います。

三つ目は、研究の世界にもっと早くから触れておけば良かったです。研究したいと思って医学部に進学しましたが、大学入学後の解放感と同級生のほとんどが臨床医志向という雰囲気流されて低学年を過ごしました。4年次夏の自主研究（希望者だけの基礎配属）期間になって、関心のあった研究テーマで国内留学しましたが、そこでは研究の面白さを味わえませんでした。その時点で将来は臨床に進もうと思いましたが、疑問を持って論理的に思考することが好きでしたので、いつか研究したいとも思っていました。6年次の夏、臨床を7年間経験された基礎系教授が他大学から着任されたと耳にして、西川伸一先生に会いに行きました。研究室ホームページもメールも無い時代でアポ無し訪問でしたが、きさくなお人柄と発生学の研究に惹かれました。この研究室で早くお世話になりたいという思いが膨らみ、すぐに大学院進学を決めました。着任直後の西川先生に出会って生涯の恩師をえたことは幸運でしたが、低学年から研究室に出入りして学会や論文の発表を経験できれば基礎医学研究者としてのキャリア形成に役立っただろうと思います。診療と基礎研究は仕事の内容が随分違うので、学生さんには自分の興味と特長を知り人生観に合った進路選択をして欲しいと思います。

最後に、テーマとは逆ですがやっておいて良かったことを一つお伝えします。卒業まであと半年、大学院進学を決めた後のある日、いつものカフェに三々五々集まって国家試験に向けた勉強をした後に、場所を移して同級生4人で卒業後の進路選択と目指す将来像を語り合っていました。ひとりが「30年後の今日、このメンバーで集まって確かめへんか？」と言い出したことから盛り上がり、遠い未来の約束を交わしました。そして時は流れてついに2024年の同日、4人で温泉旅館に泊まって卓を囲み、オレたちの30年越しの約束を果たしました。別々の道に進んだ仲間たちが、まるでこの日のために頑張ってきたかのような感動を覚えました。そして、深く繋がった仲間から自分の本質を照らす貴重な言葉をもらいました。学生の皆さんがたくさんの人と触れ合い、素敵な縁に恵まれることを心より願っています。

※この文章には不適切な言動が多く含まれますが、時代による教育環境や文化・世俗の変遷がかかわる本テーマの特性に鑑み、平成初期当時の学生生活をそのまま表現して寄稿しました。